



全日病 SQUE e ラーニング 看護師特定行為研修

循環動態に係る薬剤投与関連

区分別科目



(C) 持続点滴中の降圧剤の投与量の調整
病態に応じた降圧剤の投与量の調整の判断基準
(ペーパーシミュレーションを含む)

循環動態に係る薬剤投与 降圧剤 ～演習～

大島医院 院長
東京医科大学内科系分野循環器内科
東京医大八王子医療センター循環器内科 兼任講師
日本看護協会 看護研修学校 非常勤講師
大島 一太

症例

持続点滴中の降圧剤の投与量の調整

手順書

持続点滴中の降圧剤の投与量の調整

【当該手順書に係る特定行為の対象となる患者】

1. 血圧が維持されており、その他のバイタルや意識レベル、呼吸状態が安定している患者



【看護師に診療の補助を行わせる患者の病状の範囲】

- ☐ 意識障害、新たな神経症状の出現、胸痛、呼吸困難の出現なし
- ☐ 血圧以外のバイタルサインの変動なし
- ☐ $130 \leq \text{sBP} < 180$

病状の
範囲外

不安定
緊急性あり



担当医師の携
帯電話に直接
連絡

病状の
範囲内



安定
緊急性なし

【診療の補助の内容】

持続点滴中の降圧剤の投与量の調整
(何ml/hr減量もしくは増量するかは各施設の判断による)

特定行為
GO!



【特定行為を行うときに確認すべき事項】

- ☐ 意識状態、自覚症状の悪化
- ☐ バイタルサインの悪化(注)

上記のうち1項目でも該当すれば直ちに医師に連絡



担当医師もし
しくは当直医に
直接連絡



(注) 血圧の目標値(直ちに医師に報告すべき値)の設定については原疾患により異なるので患者を特定した際に担当医師により記載をしておく

【医療の安全を確保するために医師・歯科医師との連絡が必要となった場合の連絡体制】

担当医師。夜間もしくは休日は当直医

誰かを
あらかじめ
決めておく



【特定行為を行った後の医師・歯科医師に対する報告の方法】

1. 担当医師もしくは当直医の携帯電話に直接連絡
2. 診療記録への記載

タイミング
は先に
決めておく

診療録は
速やかに
記載する

症例

症例: 65歳 男性

現病歴:

5年前から高血圧で加療中。しばしば内服忘れを繰り返し、服薬アドヒアランスは不良。本日トイレで突然の冷汗を伴う激しい胸痛を自覚し、救急要請。

来院時現症

意識: 清明

呼吸回数 30/分

SpO₂ 99% (救急車内鼻カニューレO₂6L/分)

血圧: 180/102mmHg (左右差なし)

脈拍: 98/分 (整)

眼瞼結膜: 貧血なし 黄疸なし 頸部血管雑音なし

口唇: チアノーゼなし

心音: I 音、II 音 正常 心雑音なし

肺音: ラ音なし

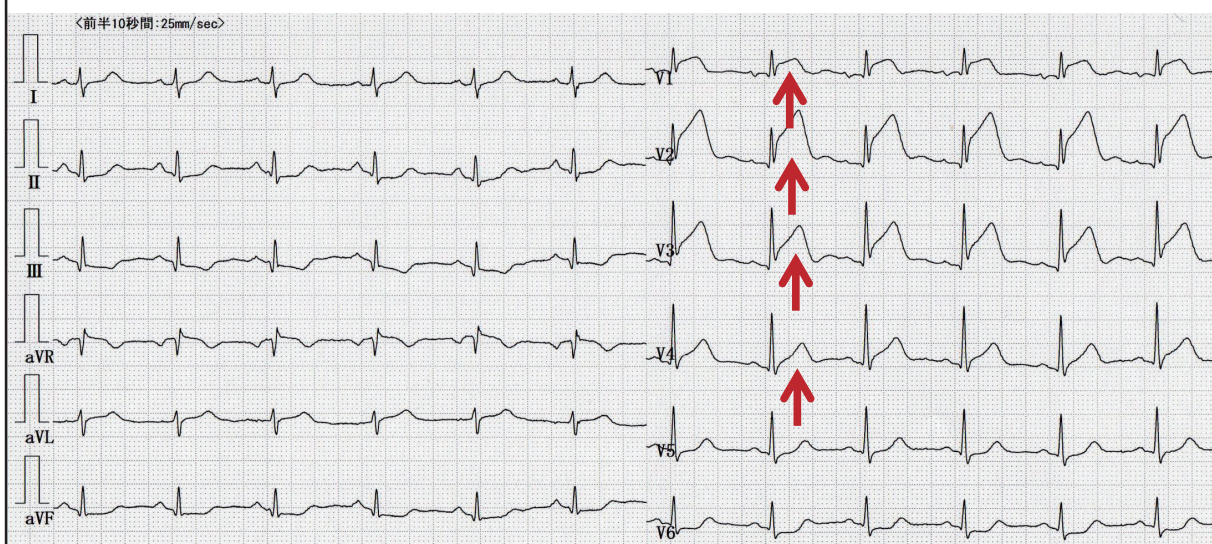
腹部: 平坦かつ軟 腹部腫瘤の触知なし

下肢: 浮腫なし

血液検査所見

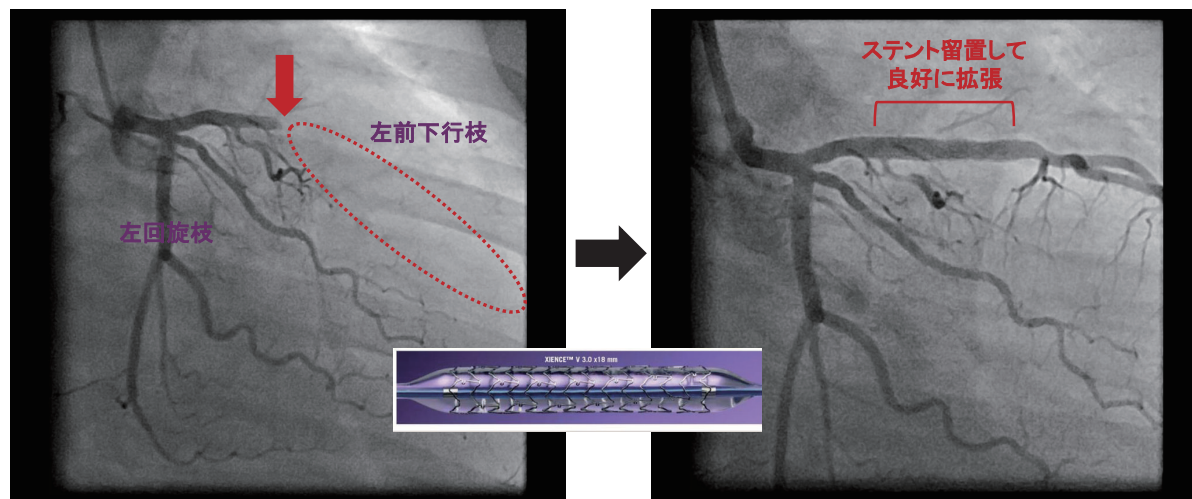
WBC 14400 / μ L	TP 7.0 g/dL	Na 142 mEq/L
RBC 474×10^4 / μ L	Alb 3.9 g/dL	K 4.0 mEq/L
Hb 13.7 /dL	T-Bil 1.2 mg/dL	Cl 101 mEq/L
Ht 42.1 %	AST 65 IU/L	
Plt 16.6×10^4 / μ L	ALT 40 IU/L	CRP 2.52 mg/dL
	LDH 482 IU/L	
	Amy 85U/L	
	BUN 22.0 mg/dL	
	Cr 0.93 mg/dL	
	CPK 2450 U/L	

心電図



V1-4誘導にST上昇を認め急性前壁中隔心筋梗塞と診断

左前下行枝が責任病変の急性前壁中隔心筋梗塞



責任冠動脈の左前下行枝を再灌流してステント留置

XIENCEステント写真提供：Abbott vascular japan

経過

術後は集中治療室に入室。

入室時血圧178/106mmHgと高値のため、降圧薬による持続点滴を開始した。

意識レベルは清明、胸痛なし。

収縮期血圧130-150mmHgに管理する方針となった。

降圧剤の持続点滴としてニカルジピン（ペルジピン[®]）を使用した。

課題①: 各課題について、時間内に記載
手順書に従って降圧薬の投与量の
調整を行えるか考察してください

- ☐ 意識障害なし
- ☐ 胸痛なし
- ☐ 呼吸回数 35/分、息苦しい
- ☐ 収縮期血圧 160mmHg

課題②: 各課題について、時間内に記載
手順書に従って降圧薬の投与量の
調整を行えるか考察してください

- ☐ 意識障害なし
- ☐ 胸痛なし
- ☐ 呼吸困難なし
- ☐ 血圧以外のバイタルサインの変動なし
- ☐ 収縮期血圧 160mmHg

課題③: 各課題について、時間内に記載
手順書に従って持続点滴中の降圧剤の投与量
の調整について、特定行為をしてください

ニカルジピン(ペルジピン^R・10mg/10mL/A)

課題④: 各課題について、時間内に記載
手順書に従って降圧剤の投与量の調整後、
次にどうすべきか考察してください

ニカルジピン(ペルジピン^R・10mg/10mL/A)

ニカルジピン原液 5A 1γ=3ml/時

(※10倍希釈で投与するときは、原液投与量から×10で換算して投与)

血圧 130～150mmHgにコントロール

0.5γずつ増量または減量 最小量:中止 最大量:10γ

- ☐ ニカルジピン0.5γ増量
- ☐ 収縮期血圧120mmHgまで低下
- ☐ 胸痛はないが、少し息が苦しい
- ☐ 心電図は異常なし

課題⑤: 各課題について、時間内に記載

手順書に従って降圧剤の投与量の調整後、
次にどうすべきか考察してください

- ☐ ニカルジピン0.5γ増量
- ☐ 血圧140mmHgまで低下
- ☐ 意識状態、自覚症状の悪化なし
- ☐ バイタルサインの悪化なし